

【書評】

仁平千香子著『読めない人のための村上春樹入門』

錦 咲やか

(東京大学大学院 修了生)

「村上春樹、好きですか？」と誰かに尋ねて言葉を交わす時、いつも互いの曖昧な間からわずかな緊張感を覚える。それは村上春樹のみに纏わる独特な作用であり、ずっと不思議に感じるとともに理由もいくつか思い当たるものとしてあった。本書はその理由を丁寧に掬い取り、疑問を鮮やかに解き明かしながら、生きるうえで普遍的に寄り添ってくれる文学の効用をあたたく示す村上春樹作品の新しい入門書として、2025年3月にNHK出版より新書で刊行された。既に大きな反響を得ており、今後もニーズに沿って広く読まれていくと思われる。

村上春樹が、現代日本の作家の中で圧倒的な人気と知名度を誇る点に異存はないだろう。さらに海外での広い人気および評価も確立し、現存の日本人作家の中で最も世界文学の名に値する作品を書いていると著者の仁平千香子氏は述べるが、これほど海外で読まれ、文学的にも評価されているという事実はそこまで国内の人々に知られていないともまた指摘している。このような日本人作家がいることは「おおごと」であると、その「おおごと」に向き合う視座を著者はさらに提示していく。

日本では、人気や知名度とは裏腹に、村上春樹作品に対して強い抵抗感を抱く読者が一定数存在する。「今さら読み始められない」「読んではみたが消化不良」「設定が非現実的で苦手」といった声もよく耳にし、「ストーリーが難解で理解できない」「比喻や言い回しがくどくて、結局何が言いたいかわからない」「性描写が苦手」といった具体的な拒絶反応も少なくない。つまり村上春樹は、最も熱狂的に読まれている作家であると同時に、最も「途中で挫折」しやすい作家でもある。なぜこれほどの世界的評価と、一読者レベルでの「読めなさ」が同居するのか。このアンビバレントな状況に対し一定の説得力ある回答であり、いわば村上春樹アレルギーともいえる読者に向けた処方箋が本書といえよう。

仁平千香子氏は1985年生まれで、シドニー大学で村上春樹研究の博士号を取得した気鋭の研究者である。前著『故郷を忘れた日本人へ——なぜ私たちは「不安」で「生きにくい」のか』（啓文社書房、2022）においては、芥川龍之介からフランツ・カフカ、ジョン・スタインベック、そして村上春樹に至るまで、多様な文学作品を通して、現代人が抱える「居心地の悪さ」や「生きにくさ」の原因を探り出す試みを行っている。著者は文学研究をいわゆる象牙の塔に押し込めず、今を生きる人々が直面する実存的な不安や危機など、「生きづらさ」に対峙するための実践的な体験として扱う。この姿勢は本書にも色濃く反映されており、本書は村上作品の難解なメタファーを紐解くパズルのような答え合わせとして機能するのではなく、村上文学を貫く最大のテーマとして「自由」を提示し、現代人が真に自由に生きるためのヒントを探るといった切実な問題意識に貫かれ

ている。

「はじめに——苦しみ悩む人々に寄り添い、人生と向き合えるよう背中を押す文学」では、村上春樹の文学が、現代社会において生きづらさを抱え悩む人々にとっていかに俯瞰的な視座を与え、人生と向き合うための背中を押すものであるかという本書全体のテーマが提示される。

「第一章 村上春樹の読まれ方——批評的読解と世界的共感」では、時に国内で拒否反応も示される村上作品が、世界ではどのように読まれ、なぜ国境を越えて広範な共感を集めているのかについて解説される。著者は、村上作品の主人公が自由を失わずに現代を生きるあり方への憧れを、国境を越えた村上春樹ブームの要因として説明する。

「第二章 村上春樹が考える「自由」とは何か——地下鉄サリン事件と「単純な物語」」においては、村上がデビュー以来一貫して描いてきた自由の困難さに焦点を当てる。村上は様々な人間のさまざまな側面を描くことで、彼らの不自由さや、何に気づけば彼らが不自由さを克服できるのかを読者自身が考える材料を与えている。日本において自由でいようとすることの「きつさ」から、「考えない自由」が若者たちに選ばれた経緯等の考察がなされるが、複雑な現実を、例えば陰謀論やカルト教義などの「単純な物語」に帰してしまうことは、自ら考える力を放棄することに他ならない。自分の頭で思考し、判断・決断する「自由」は過酷であり、他人の命令や空気に扇動される方が人間にとって楽であるという心理に触れながら、地下鉄サリン事件およびオウム真理教への関心等を通じて、教団のみならずマスメディアも含め、現実を善と悪にきっぱりと分けてしまう単純な二元論の危うさについて指摘する。

「第三章 「橋を焼いた」作家——三つの習慣と「意識の整え方」」では、作品のテキスト分析にとどまらず、村上春樹という作家の生き方そのものに注目し、現代を生き抜くための実践的なモデルとして提示している。村上が経営していたジャズバーを畳んで退路を断ち(=橋を焼き)専業作家となった経緯や、1日4時間集中して執筆し、ランニングと読書を日課とする習慣などによって「意識の整え方」を紹介し、集中力と持続力を鍛えることが自由な生き方の実践を支えると伝える。村上のストイックな姿勢は、自由に生きるための具体的な生存戦略であり、サバイバル術そのものとも思われる。このような本著のアプローチに対し、人生訓や自己啓発的な要素から多少違和感を覚える向きもあるが、村上文学の「自由」という一貫したテーマ性が終始著者の切実な文学体験をもって裏打ちされているため、他の章とも上手く接続されている。

「第四章 『ノルウェイの森』と『1Q84』——ベストセラーの“謎”を解く」では、大ベストセラーの長編作品を中心に読み解きを行う。『ノルウェイの森』の主人公ワタナベは、直子との過去の記憶を書き換えつつも自己否定を抱え続けており、ラストシーンで示される現在の語り手が戻ってこない物語の設定から、自分への信頼が失われたままであることの不自由さを論じる。『1Q84』における、リトル・ピープルの善悪二元論に基づいた他者排除の危うさは、第二章とも存分に響き合っている。

「第五章 諸刃の剣としての「想像力」——「かえるくん」・「ドライブ・マイ・カー」・『海辺のカフカ』」では、不条理な現実に向き合う上で主人公たちが用いる「想像力」がどのように作用するかを論じ、想像力という思い込みによって自らを傷つけ不自由にしないこと、自分の存在に対して想像力を働かせることの大切さを問う。

「第六章 資本主義社会をどう生きるか ——「交換」から「象」へ」では、村上作品を通じ、資本主義や、消費＝記号化という現代の巨大なシステムの問題を掘り下げていく。著者は、タイムパフォーマンス（タイパ）が重視され、極限まで効率が求められる現代の資本主義における自由の発露を、「パン屋再襲撃」で徹底して交換の拒否に拘った夫婦に見出し、村上の「本当に価値のあるものごとは往々にして、効率の悪い営為を通してしか獲得できないものなのだ。」（『走ることに ついて語るときに僕の語ること』）という言葉を用いる。村上作品の食事シーンなど、家事に費やす時間の豊かさの考察も興味深い。

「おわりに——自ら作った壁に向き合う」では、『街とその不確かな壁』における「壁」が、主人公である「私」が内側に作り上げたものとして表れており、その壁が通り抜けようとする信念によって形状や強度を変えるものであることから、壁を作っているのも壁を乗り越えられるか否かをきめるのも自分である、と考察される。著者は「壁の強度を上げているのは、自らの物語に対する無関心」であると述べる。資本主義社会、情報過多社会において人々は自分の軸を見失いがちだが、村上作品は常に、自分で決めた「自由を生きる」意志の大切さを伝え続けていると。

この「壁」のメタファーは、2009年にエルサレム賞を受賞した際の村上の有名なスピーチ「壁と卵」へとつながっていくだろう。「どれほど壁が正しく、卵が間違っていようと、私は卵に寄り添います」。卵がたとえ間違っているとしても卵側に立つことが小説家の務めだという村上の表明について、これは卵を擁護するためではなく、卵側から見える現実も誰かが伝えなければならないと信じるからであると著者は述べる。著者は、客観的な事実より、それぞれの目に映った「真実」を、その個々の語りや、個々の声を信じて伝え続ける姿勢を村上春樹という小説家の態度とみている。卵の声に耳を傾けると同時に、自らの内なる壁をいつの間にか作り上げていないか、壁側へ強固に加担してはいないだろうか、と問い続けること。壁は内側にも外側にもあり、二重の意味で立ちはだかっているが、常にひとりひとりの物語の力を信じるのが、自由への一歩だと示されている。

自らの物語が他者のそれと同じくらいかえがえないものという意識を持つための努力は、引いては物語を受容する力にも通じるのかもしれない。『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです』より、「物語を体験するというのは、他人の靴に足を入れることです」という村上春樹の言葉が引用される。小説を読むことで、読者は他人の靴に足を入れて視点を複数化させ、それまでの信念や思い込みに対して新鮮な発見が加わり、様々な世界についての理解が深まる。それは村上が気づいた、オウム真理教の信者たちが共通して小説を読む体験をしてこなかった事実を想起させる。一方的かつ暴力的な物語に対峙する力を備え持つために、小説の力が必要とされるのである。

紀伊國屋書店グループ主催「キノベス！2026」における対談スピーチで、村田沙耶香が「小説臓」という、小説を咀嚼する臓器が全ての人間に備わっているという発想を持っており、そこから新作を執筆中であると語っていたが、まさにそのような「小説臓」を鍛えていくことが大切ではないだろうか。村田の個人的な地下室——無意識の広い部屋には小説でしか行けないという意識は村上春樹にも通ずるように思われた。本書の著者も述べるように、文学が見せてくれる世界には人生の悩みに纏わる「リアルな答え」があり、物語は究極の現実として、自ら生きるための地下水路のような糧となると感じる。

すでに村上作品を読み込んでいる熱心な愛読者にとっても、本書は自らの読みを相対化し、もう

一度あの作品を読み返したいと思わせる強い求心力を持っている。これまでたとえ「不思議でおしゃれな物語」として消費していた作品であったとしても、そこに通底する切実な、そして普遍的な自由への希求を感じたとき、読者はかつてとは全く異なる手触りや、自由への指針に導かれる共感の眼差しをもって村上文学と再会することになるだろう。

一方で、なぜ私たちは村上春樹を「読めない」のか、本書では一つひとつの理由自体について詳しく掘り下げられてはいないため、難解なメタファーや性描写によって入り込めない読者への導きとしては多少弱い点もみられた。ただ、それらは結果として全て「物語」を享受する力、「自由」というテーマによって説明されているともいえる。著者は、村上文学への揶揄について「物語に対する評価ではなく、歴史や社会問題への言及や文化的記号の使用など物語以外の部分に対する評価ゆえ」と述べ、物語の力が全てを凌駕するかのような村上作品における「自由」へのあり方を、世界的な評価や人気に至る共感要素として精緻に言語化している。

著者による「苦しみ悩む人々に寄り添い、人生と向き合えるよう背中を押す文学」としての村上文学の探求から、文学は、資本主義社会が提示する価値観やスピード・効率化の嵐のなか、立ち止まり、悩み、不確実な世界と向き合うためのアンカー(錨)のように思われる。そしていかなる時も個々の声に耳をそばだて伝え続けることが、文学の手法であり、村上春樹作品はずっとその実践とともにある。

本書は、村上春樹を「読めない」すべての日本人へ向けられた、それぞれの「自由」への気づきを促し、出発点を示す招待状かつ地図となる好著である。